

(始良郡栗野町北方小屋敷)

位置と環境

市街地の北西1キロ、川内川が南行から北西方向へ流れを変える付近の右岸、標高210メートルの台地に立地している。このあたりは地下式横穴墓群が多く分布する地域で、そのほかに地下式板石積石室墓・円墳も存在している。

調査の経緯

周辺の地下式横穴墓は、明治34年(1901)の鉄道工事により発見されて以来、工事などによって多く発見され、寺師見國、梅原末治によって調査されたこともある。

昭和45年(1970)に栗野町教育委員会が発掘調査を行った。

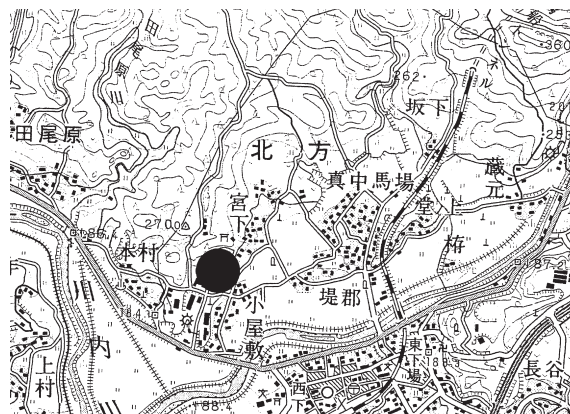
遺構と遺物

2基が調査された。2基ともに同じ型式で、ドーム状の天井をもつ隅丸長方形の玄室に平入の入口がつくもので、新しい型式である。

1号は玄室の長さ169cm、最大幅90cm、高さは中央部で62cmあり、床面は平坦で、とくに死床はもうけていない。羨道は入口の幅40cm、高さは50cmできわめて狭く、奥へ広くつくられている。竪穴状の入口は上面が縦横94cmの半円形で下部へ狭くなり、深さは60cmで奥へ傾斜している。全体に規模が小さく、掘削には刃幅8cmの工具を用いているが、黒褐色粘質の硬い層に構築しているために、玄室の保存状態はよい。羨道は3枚の板石で閉塞し、入口には土を埋め戻して地表には封土を設けていない。

埋葬は玄室に二つの遺体を並置しているが、狭いため下肢を曲げた半屈葬である。遺体と奥壁との間には鉄鏃10、骨鏃3本の束と剣1本を副葬している。鉄剣は長さ43.5cm、幅3cmで目釘穴1個を有する。さやと思われる木質が残存している。鉄鏃はいずれも長茎平根の三角形鏃で、茎には木質と桜皮が残っている。長さが12~16cmある。骨鏃の長さは10cm位と思われる。

2号は玄室の長さ170cm、幅120cm、羨道の長さ30cmで発見時の破壊のために、閉塞状況は不明である。



第1図 北方地下式横穴墓の位置

小児骨を含む人骨3体、鉄刀1本が出土している。刀は刀身が63cmと長く、茎部を一部欠損している。平造りで片そき関となっている。

ともに古墳時代後期である。川内川の上流域は地下式横穴墓の西限で、後期から終末期のものが一般的である。

特徴

川内川上流域にある特異な形の地下式横穴墓である。

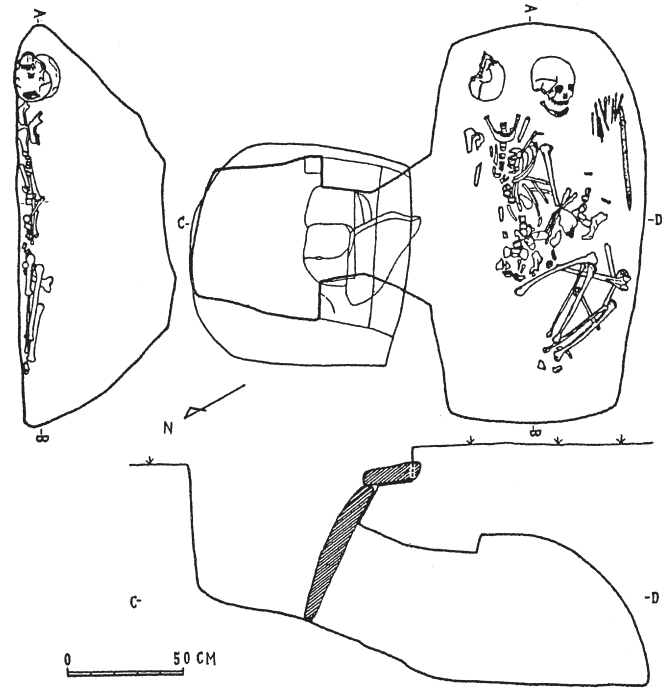
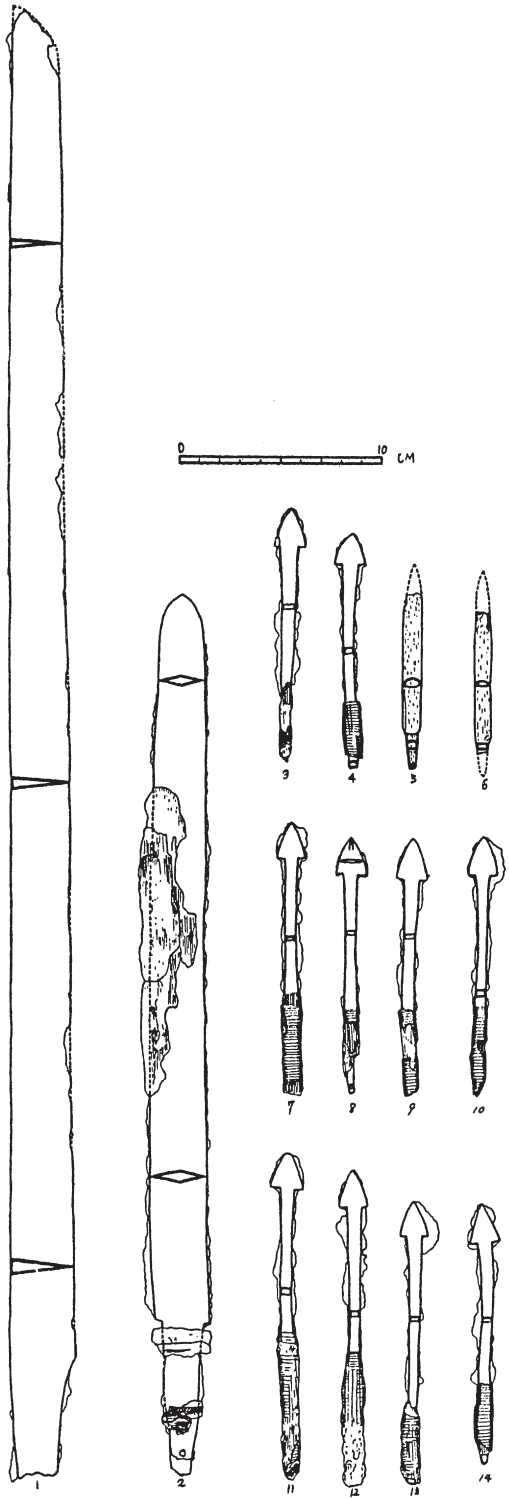
資料の所在

昭和45年に出土した鉄器は、栗野町教育委員会に保管されている。

参考文献

河口貞徳1971「北方地下式横穴」『鹿児島考古』第5号鹿児島県考古学会

(河口貞徳)



第2図 1号地下式横穴墓

第3図 出土した鉄刀・鉄剣・鉄鏃